

# プラティークと一般化フレーム問題

## — ブルデュー理論自体の「誤認」効果 —

桜井芳生

【要約】ブルデューの「プラティーク」論は、「主観的な意味」を含ませている「行為」に主に照準する主流的な社会学のアプローチに、大きな反省を迫るものである。本稿はまず、「プラティーク」論の視点によってなされたブルデュー社会学のプラスの効果を確認することからはじめる。この効果は、当事者たちの「誤認」をいわば暴露するような啓蒙的な作用として働いていることを確認できる。

しかし、本稿の後半で我々は、ブルデューの「プラティーク」論を中心とする理論が、それ自身、当事者たちの「誤認」を再認（追認）する効果をもってしまうことを主張する。この点をのべるために、我々は、人工知能の論圏で議論されている「一般化フレーム問題」を援用する。こうして、我々は、ブルデュー理論の「諸刃の剣」性を自覚することができる。いわば、ブルデュー理論の「ライプニッツ」主義を越えることを目指しうようになるのである。

### 【ブルデューのプラティーク・ハビトゥス論】

ピエール・ブルデューの一連の仕事は、日本の社会科学界にも少なからぬインパクトを与えつつある。ここでは、ブルデューの「プラティーク」や「ハビトゥス」概念が、社会科学的な探究にとってどのような意義（そしてまた限界・危険性）を持っているかを計測することをこころみたい。ブルデューの「プラティーク」的アプローチは、「主流的」な社会学の方法に対して、大きな反省を迫るものである点でプラスの貢献をしているといえるが、ブル

デューの「プラティーク」的アプローチ自身がまた大きな問題点を有している、というのがこれから述べようとする我々の基本的主張である。

ブルデューの「プラティーク」概念やそれと密接に関連している「ハビトゥス」概念を検討するにあたって、まずは、ブルデュー自身が、この両概念についてどう述べているかを聞かねばなるまい。

『実践感覚』の有名な箇所ではブルデューは、「ハビトゥス」と「プラティーク」をこう描く。

生存のための諸条件のうちで或る特殊なクラスに結びついた様々な条件づけが、ハビトゥスを生産する。ハビトゥスとは、持続性を持ち移調が可能な諸傾向性のシステムであり、構造化する構造として、つまりプラティークと表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造である。そこでは、プラティークと表象とは、それらが向かう目標に客観的に適応させられうるが、ただし目的の意識的な志向や、当の目的に達するために必要な操作を明白な形で会得していることを前提としていない。プラティークと表象はまた、客観的に「調整を受け」「規則的で」ありうるが、いかなる点でも規則への従属の産物ではない。(訳書83-84頁。ただし、訳文はかならずしも訳書どおりではない。以下同様)

早速ここから、いくつかの点が読み取れるだろう。まず第一は、プラティークとハビトゥスとの関係である。ハビトゥスは、プラティーク（ときに「慣習行動」などと訳される）の「産出・組織」の「原理」として機能を持つのである。プラティーク自身が、「慣習的」な振る舞いの意義をもつから、ハビトゥスとは、さしづめある人が持つ「慣習の総体」あるいは「個々の慣習的行動を生み出す、プラティーク（慣習的行動）の母体」とでもいえるだろう。

そして、このハビトゥスによることで、プラティークはそれが向かう「目

標」に対して、「客観的に（すなわち「主観的≡ひとりよがり」ではなく）適応させられうる」のである。しかし、その際「目的の意識的な志向や、当の目的に達するために必要な操作を明白な形で会得することを前提としていない」。つまり、プラティークの行使は往々にしていわば「暗黙的」「無自覚的」「反射的」であると、いえるだろう（ブルデューは、『実践感覚』の別のところで、ハビトゥスを「意識も意志も持たぬ自発性、ハビトゥス」（訳書89頁）と記述している）。しかし、そうでありながらも、プラティークの行使は、無秩序・ランダムではなく、「規則的」なのである。

さらにハビトゥスに対して、ブルデューはこう述べる。

全き発明術としてのハビトゥスが、数の上では無限で、（対応する状況と同様に）相対的には予見不可能なプラティーク、しかしその多様性においては限界のあるプラティークの生産を可能にするのだ……。要するに、客観的な規則性の一定のクラスの生産物たるハビトゥスは、それら規則性が設ける限界内で「理に適った」、「常識」に属すすべての振る舞いを、それだけを生み出す傾向をもつ。（訳書88頁）

生存のために諸条件の間に均質性があるために生ずるグループやクラスのハビトゥス間の均質化によって、プラティークは、どんな戦略上の計算も、規範へのどんな意図的準拠からも離れたところで客観的に同調したものになり、またあらゆる直接の相互行為が不在のままでも、ましてや目に見える協奏なしでも互いに整合するものとなる。・・・ライプニッツは言う。「お互いにぴったり合っている二つの掛け時計または懐中時計を想い描いてみよ。それには三つの方法がある。第一は相互影響である。第二は・・・職人を時計にくっつけておくこと。第三は、これら二つの時計を、後で一致を保証できるくらいにまできわめて巧妙に精巧に作ることである」。指揮者のいない

このオーケストレーションの真の原理を、すなわち諸個人の投企の自発的または強制された組織化が全くない時でさえプラティークに規則性と統一と体系性を附与するオーケストレーションの原理を知らない間は、ひとは必ず意識的な協奏以外に統合原理を認めない素朴な技巧主義に陥る。(訳書93-94頁)

すなわち、ハビトゥスは、無限に変化する状況に対しても、その場その場で「理に適った」プラティークを産出するのである。しかもこの際には、個々人のもつハビトゥス同士は、相互の影響や相互の調整過程は必要ないのである。ちょうど巧妙・精巧につくりあげられた第三の「ライブニッツの時計」のように、諸個人のハビトゥスは、指揮者のいないオーケストラのように、「組織化」なしの「一致」が「保証」されるのである。

### 【社会学における「ハビトゥス」概念の有効性】

マックス・ヴェーバーが、「理解社会学」の対象を「主観的な意味」を含ませている「行為」として以来（「行為とは、単数或いは複数の行為者が主観的な意味を含ませている限りの人間行動を指し・・・」『社会学の根本概念』訳書8頁）、社会学においては、主観的な意味が自覚された振る舞い（行為）に照準することが優遇されてきた。しかし、上述のようなブルデューの「プラティーク」「ハビトゥス」論は、このような社会学の「主流的」な方法論（戦略）に再考を迫ることになるだろう。なぜなら、ブルデューの主張が正しいとすると、社会を対象として追尾しようとする場合には、ひとびとの「自覚された振る舞い」（≡「行為」）だけでなく、「自覚されない」ような慣習の振る舞い（プラティーク）を追尾することが、社会科学にとって不可欠の条件となるからだ。ヴェーバーの多大なる影響下で、ついつい「主観的な意味」が付与された「行為」のみに着目してしまう社会学者が多いと思わ

れるので、ブルデューの「プラティーク」論の指摘は、それが正しいとすると、大きな意義をもつものといえるだろう。

ブルデューのこのようはプラティーク論的な視点が、実際の社会学的分析にとって、どのような「切れ味」を示すか実際にみてみよう。プラティーク論の切れ味がもっとも明確にあられるトピックの一つが、有名な『再生産』における「排除と選別」のメカニズムであろう。

ここでのメカニズムは、大略こうであった。ブルデューによれば、ある者の生存条件（階級上の位置など）によって、彼は、幼少期に「一次的ハビトゥス」を習得する。すなわち、階級的位置が上位の者は上位に相応しい一次的ハビトゥス（簡単にいえば、「金持ちに相応しい身の振る舞い方」）を身につけ、下位の者は、下位に相応しいハビトゥス（「貧乏人に相応しい身の振る舞い方」）を身につける。そして、この一次的ハビトゥスの「種差」が、彼が試験を受ける際効いてくるのである。（フランスにおける）試験は、多くは、このような上位者の一次的ハビトゥスに有利なようにできている、とブルデューは考える。しかも、試験の有利／不利が、一次的ハビトゥスの種差に相関しているとは、当事者たちは自覚していない。よって、試験の勝利者たちは、「天賦の才」もしくは「本人の努力」の結果として、試験の勝利を勝ち得たように、当事者たちにはみえてしまう。しかし、ブルデューにいわせると、それは「誤認」である。ある者が試験で勝利したとしても、それは、彼の一次的ハビトゥスの上位性、ひいてはそのハビトゥスを生み出した彼の生存条件（階級上の位置など）の上位性によるのである。しかし、この点が当事者には自覚されていない。それゆえ、試験の結果として彼が階級上の上位の位置を占めてしまうこと（すなわち、社会（の階級状況）の再生産）が、「正当化」されてしまう。

このようなブルデューの観察が事実認識としての的を得たものであるかは、ここではとわないでおこう。しかし、このような説明の仕方を可能とするのが、ブルデューが導入した「ハビトゥス・プラティーク」の概念系であるこ

とは、認めることができるだろう。そして、主流派社会学の「意味」に指向した「行為」にのみ照準するやりかたでは、このような説明を行うことができないこともいえるだろう。ブルデューは、こうして、「ハビトゥス・プラティーク」の概念系を導入することで、あらたな説明方法を可能にし、当事者たちの「誤認」のサイクルを暴露することを可能にしたのである。

### 【一般化フレーム問題】

以上のように我々は、ブルデューが導入した「ハビトゥス・プラティーク」概念の有効性を確認してきた。では、この「ハビトゥス・プラティーク」論は問題点はないのだろうか。じつは、我々は、まさに「誤認」の面をめぐって大いに問題あり、と考えているのである。この点を示すために、一見唐突だが、「一般化フレーム問題」という論圏へと迂回するのが好便である。

最近、AI（人工知能）研究者を中心に、「フレーム問題」という問題が、関心を集めている。フレーム問題の発端は、人工知能の問題解決の領域で生じたある困難であった。フレーム問題の直観的理解を得るためには、デネットのロボットの例がもっともわかりやすい（大澤、松原参照）。デネットの描くロボットは、そのエネルギー源であるバッテリーをある部屋から取り出すこと、という課題を持っている。最初のロボットは、バッテリーがしまつてある部屋に時限爆弾が仕掛けられているのを知らされた。かれは、すぐ部屋を発見し、部屋のなかのワゴンのなかにバッテリーがのっているのを確認した。かれはただちに、ワゴンごとバッテリーをとりだそうとしたが、同じワゴンに爆弾ももっていたのでバッテリーは、爆発してしまった。かれはワゴンを持ち出せば同時に爆弾も持ち出したことになることをわからなかったのである。そこで、設計者は、ロボットが自らの行為の意図された結果のみならずその副次的結果も推論できるように、プログラムを書き換えた。この

新ロボットは、同じ問題に直面したときやはりワゴンを引き出せばよいと考え、副次的効果を推論しはじめた。「ワゴンを引き出せば車輪が回転する」「ワゴンを引き出せば音がする」「ワゴンを引き出しても部屋の色はかわらない」等々。そうこうしている間に、爆弾は爆発してしまった。ふたたび、設計者は、「ロボットに関係ある結果と関係ない結果の区別を教えてやり、関係ない結果を無視するようになくしてはならない」と考え、目下の目的に照合して関係あるかないか、という区別を演繹するプログラムをロボットにセットした。この第三のロボットは、同じ状況に直面してもなにも行動を起こさなかった。いく千もの「結果」が目下の目的に「関係ある」かどうか演繹するのに忙しくて行動をおこすことができないのだ。当然そのあいだに爆弾は爆発してしまう。

以上のような人間にはごく簡単にできそうに見えるようなことを、AIにさせることがむずかしいのである。一見すれば、このような「問題」は、すこし工夫をすればごく簡単に克服できるようにみえるかもしれない。しかし、克服の工夫は、すべて失敗に終わる。たとえば、ある命題はそれが明示的に否定されるまでは成立している、という公理を導入すれば、容易に困難をクリアできるようにみえるかもしれない。しかし、この方法では上述の第三のロボットのように、たしかに状態の記述の量は、減らすことができるけれどもある状態が成立しているかどうかをしるための推論の量が爆発してしまう。フレーム問題に対する様々な「対応策」とそれぞれの「失敗」の詳細は、大澤や松原の論文にくわしい。この「問題」克服のさまざまな工夫は、たとえ「記述の量の爆発」を抑え得たとしてもその代償として「推論の量の爆発」をもたらしてしまうのである。

以上のような、フレーム問題の「問題」化と、その「解決の失敗」をみてみるとそこからある教訓が得られる。それは、通常我々人間が何気なく振舞っている日常においても、ある部分的変化（それは、人間やAI自身がひ

きおこした「行為」でもよい)が環境に対して、(当の人間やA I自身の情報処理能力に比して)無限の変化の可能性(したがってこれは無変化も含む)をおこしているということである。そして、A Iは、この「無限の変化の可能性」にいわば愚直に直面することで、適切な反応を有限の処理能力で引き出すことができず、この「問題」に逢着してしまう、ということである。この点を松原は、「一般化フレーム問題は、情報処理の主体が有限であることから、すなわち膨大な情報のうちの一部しか参照できないことから生じる・・・」(223頁)といている。この松原の記述を参考にして、我々は、「有限の情報処理能力しかもたない主体(A Iや人間)が、無限に多く変化する状況のなかでいかに適切にふるまうか、という問題」をフレーム問題の我々の「定義」としよう。

### 【ブルデュール理論の不十分性】

我々の「フレーム問題」の定義は、上述のようであった。我々は議論が混乱するのをさけるため、これを「一般化フレーム問題」とよぶことにしよう。ところで、フレーム問題を同様に定式化した松原がいていることであるが、フレーム問題をこのように定義してしまえば、実はフレーム問題(一般化フレーム問題)の真正なる「解決」じつは、不可能となる。なぜなら、A Iや人間が有限の情報処理能力しかもたない主体であるならば、それらが有限の時間のうちにおいて無限に変化する状況に対して適切な反応をすることは原理的にできないからである。通常、人間においては、「無視」というしかけでもってこの問題がクリアされているようにおもわれるかもしれないが、上述の「第三のロボット」が示しているように「適切に無視」するためにさえ「無限量の演繹」が必要なのである。

(ただ、ここにおいて我々は、「人間」(ならびにA I)を「有限の情報処理能力しかもたない組織体」として把握している。これとはことなった「人間

観」を持つのであれば、とりあえずは、一般化フレーム問題の「解決」は不可能であるとは帰結できない。たとえば、プラトンのいわゆる「想起説」はこのような方途の一つといえるかもしれない。

よって、松原のいうとおり、AIについても人間についても「いかに一般化フレーム問題は『解決』されているか」という問題設定は、禁じられている。それは、もともと「解決不能」なのであるから。

ここにいたって、我々がなぜわざわざ、AIにおける「フレーム問題」という論圏へと迂回してきたかを十全にのべることができる。ここにおいて、松原を援用しつつ述べたことは、じつはそのまま、ブルデューの「プラティーク」「ハビトゥス」論にあてはまると思われるのである。

すなわち、主観的な意味を付与された「行為」に優先的に照準する「理解社会学」的戦略に対して、ブルデューの「プラティーク・ハビトゥス」的アプローチは、自覚された意味を持たない暗黙的で慣習的な振る舞いに照準することを目指すのであった。しかし、このような方途が、ひとびとの振る舞いを追尾するために「十分」条件であるかどうか、という問いを我々は提出することができるだろう。そして、この問いに対して、今や「否」と回答することができる、と思われるのである。なぜなら、そもそも、ひとびと自身、みずからの振る舞いを無限に多様に变化しうる状況（環境）に対して常に「適切に」選択することは、一般化フレーム問題の考察の結果として、原理的に不可能なのであるから。したがって、ひとびとの振る舞いをいかに観察者が完璧に把握したとしても、所与の状況で当事者がいかに「適切な振る舞い」を選択するか、を追尾することは原理的に不可能であるからである。

## 【ブルデュー理論の「誤認」効果】

以上、我々は、ブルデューのプラティーク論が、在来の社会学上の方法に

対して大きな意義をもつことを認めつつも、プラティーク論は、ひとびとの振る舞いを追尾するうえで未だ「十分」ではないことをみてきた。しかも、我々の考えるところによれば、ブルデューのプラティーク論はたんに「不十分」であるのみならず、(この不十分さと密接に関連しているためなのだが)、ひとびとの振る舞いを追尾するうえで、「有害」でもあるように思えるのである。

なぜなら、ブルデューのプラティーク論によると、あるハビトゥスを完璧に体得できた者は、任意の状況においても、「適切な」プラティークを産出できるように、含意されてしまうからだ。しかし、我々は、一般化フレーム問題へと迂回することによって、この点は保証されないことを確認してきた。よって、我々の視点からすると、人々は、多様な状況に対して、振る舞うさいに、それが常に「適切であるかのよう」に見えるとしたら、そこにはなんらかに「ごまかし」の「仕掛け」があるはずである。しかし、ブルデューの議論からは、むしろ逆に、「適切だとされた振る舞いは、たしかに適切であった」とする当事者たちの思念を追認してしまう効果が生じてきてしまうのである。しかも、ブルデューによると、彼の述べる「ハビトゥス」の習得は、いわばスポーツにおける「カン」(センス)に凝せられるものであって、コトバでは表現しがたいものである。よって、ある振る舞いが「適切」とされ、別の振る舞いが「不適切」とされたとしても、その区別が、「ハビトゥスの習得の十分さ／不十分さ」によるものであるのか、それとも、上述のようなたんなる「ごまかし」の産物であるかは、我々の視点からは判断できないのである。のみならず、ブルデュー的視点からは、自動的に、ある振る舞いの「適切 不適切」は「ハビトゥスの習得の十分さ／不十分さ」に対応せざるをえなくなってしまうのである。

言いかえると我々の観点からすると、ブルデューのいう「シャン(場)」における「ゲーム」において、ある者が「勝者」となったとしても、それは、彼が、そのシャンにおいて問題となる「ハビトゥス」をより十全に習得して

いたから、とはかぎらないのである。

ところが、ブルデューの議論からすると、ハビトゥスの（完全な）体得は、彼が引いていた「ライプニッツの時計」のたとえのように、あらゆる状況において、「適切なプラティーク」を産出するようにみえる。したがって、ブルデューの議論は、じつは当事者たちの「当該社会において『適切』とされる者こそが、まさに『適切な者』である」という思い込みを、いわば追認してしまうのである。

ここに、我々は、ブルデューの「プラティーク」論の「有害性」を見出すことができるだろう。

## 【ブルデュー・プラティーク論の不十分性と有害性、我々の課題】

まとめよう。

我々は、本稿で、ブルデューのプラティーク論の意義（有効性と限界）とを計測しようとした。プラティーク論の有効性として、「理解」的アプローチが主流の社会学にあつて、必ずしも意識にのぼらない振る舞い（プラティーク）に照準することの重要性を、ブルデューの「排除と選別」のトピックに関して確認した。

しかし、我々は、一般化フレーム問題を援用することで、ブルデュー・プラティーク論の「不十分さ」と「有害さ」をも指摘した。すなわち、ハビトゥスは任意の場面において「適切な」プラティークを出力しうるものではないこと、このことをブルデューは自覚していない。（以上「不十分性」）。

さらに事態はこうであるのに、ブルデュー理論は、あたかもその場その場での「プラティーク」が「適切」であるかのようにみせてしまうこと。すなわち、ブルデュー理論自身が、誤認＝再認的効果をもってしまうこと（「有害性」）、を指摘した。

では、一般化フレーム問題的な視点を經由したあとで、人々の振る舞いに

対して、我々はどのようなモデル（理論）を構築できるであろうか。この点は、すでに部分的には行っている（桜井1991）が、これからの我々の課題といえるだろう。

（議論の必要のため、「フレーム問題」の説明について、私の過去の文章と重複しているところがある。了承されたい。）

## 文 献

- 松原仁 1990 「一般化フレーム問題の提唱」, マッカーシー・ヘイズ, 松原仁 『人工知能になぜ哲学が必要か』 哲学書房
- Bourdieu, Pierre 1970 *la Reproduction* =1991 宮島喬訳 『再生産』 藤原書店
- Bourdieu, Pierre 1970 *la Distinction*=1989 石井洋二郎訳 『ディスタクシオンⅠ』 新評論, 1990石井洋二郎訳 『ディスタクシオンⅡ』 藤原書店
- Bourdieu, Pierre 1980 *le Sens Pratique*=1988 今村仁司・港道隆訳 『実践感覚Ⅰ』, 1990今村仁司・福井憲彦・塚原史・港道隆訳 『実践感覚Ⅱ』 みすず書房
- 大澤真幸1990 「知性の条件とロボットのジレンマ」 『現代思想』 18-3, 18-4
- 桜井芳生1991 「規範不安とオーソリティ・バブルー一般化フレーム問題を導きの糸とする「権威」問題の探究の試みー」, 数理社会学会 『理論と方法』 6-2
- Weber, Max 1922 *Soziologische Grundbegriffe*=1972清水幾太郎訳 『社会学の根本概念』 岩波文庫